

最優秀賞

宮崎県立都城商業高等学校

活動の内容 (概要)	キャリア教育推進のため、二つの地域共創の取組を展開している。共創ウェルビーイング部では、交流拠点「のくにラボ」を創設し、世代を超えたキャリアを育む。紙漉き文化再生プロジェクトでは、廃棄物活用和紙を企業と開発する等、持続可能な環境教育を推進している。さらに、これらの取組を通じて連携した企業人や有識者が、全校生徒対象の探究活動や対話型ワークショップに参加し、全生徒たちのキャリア形成を支援する。
審査委員コメント	<p>・目的の明確さと、それを達成するための具体的な手立てが地域のニーズに応えるとともに、キャリア教育の充実にもつながっており高く評価できる。地域課題を「学びのフィールド」として捉え、交流拠点「のくにラボ」を創設し、地域住民との日常的な交流の場を設けている点は、地域との連携を深める優れた取組である。また、地域の特色を生かした「都城リジェネ和紙」という独自ブランドを立ち上げ、継続的に運営していることは、地域資源の活用と持続可能な活動の好事例であり、全国に広げるべき内容であった。</p> <p>・生徒が地域と真摯に向き合い、自らの手で「のくにラボ」を創り上げた姿に心から感動を覚える。設計から施工、運営に至るまで主体的に関わり、世代を超えた交流の場を築いた経験は、まさに実践的なキャリア教育の理想形である。地域の方々や教育関係者と協働しながら、生徒が中心となって信頼関係を築いたことにも深く感銘を受ける。社会に必要とされる役割を担いながら、自らの未来を描いていく姿は希望に満ちており頼もしい。このような温もりと実践にあふれた学びの場が、今後さらに広がっていくことを心より願う。</p> <p>・都城商業高校の取組は、地域と共に育つ商業教育の理想を示している。生徒が商品開発から販売、広報まで一貫して担い、経済活動について体験を通して学ぶことができている。地域の方々や商工会、行政との連携も丁寧であり、生徒の「やってみたい」という気持ちが地域の中で支えられている。授業の枠を超えて地域と関わり、学びを実社会に活かす姿は、これからのキャリア教育の理想形に近い。先生方も生徒の主体性を信じて見守り、挑戦を温かく支えている。活動を通して地域の中に生徒の居場所が生まれていることは何より素晴らしい。今後も地域とともに生きる商業教育として、若者が地元を誇りをもてるような実践が続いていくことを期待する。</p>
連携・協働している 機関や団体、組織	<p>教育関係者(学校、教育委員会等)</p> <p>宮崎県教育委員会、金沢工業大学教職課程准教授 平真由子氏、宮崎大学地域資源創成学部教授 谷田貝孝氏、宮崎大学 学び・学生支援機構 特別講師 中山 隆氏、独立行政法人国立高等専門学校機構 都城工業高等専門学校 杉本研究室</p> <p>行政(首長部局等)や地域・社会(NPO法人やPTA団体等)、産業界(経済団体や企業等)</p> <p>NTTコミュニケーション科学基礎研究所 上席特別研究員 渡邊 淳司氏、こども家庭庁、都城市、都城市地域プロジェクトマネージャー 池田 浩二氏、都城商工会議所、都城市立図書館、じんちょう事務所 井口 仁長氏、MRT宮崎放送、柳田酒造合名会社、合同会社YOYE、CaramelStudio、合同会社ヤッチャ、大石製茶、都城市山野原公民館、紙漉 福田、宮崎プーゲンベリア空港ビル株式会社、日本航空株式会社宮崎支店、阿波手漉和紙商工業協同組合、神柱宮、タマチャンショップ都城本店、宮崎県地球温暖化防止活動推進センター、宮崎県総合博物館、スターバックスコーヒーイオンモール都城駅前店、川原製作所 川原 隆邦氏、一般社団法人心理的安全性アンバサダー協会 理事 福島 梓氏、株式会社ベネッセコーポレーション 他</p>

<p>活動開始の経緯</p>	<p>本校のキャリア教育は「生徒一人ひとりが自己のあり方や生き方を深く考え、社会と関わる中で自身の役割と貢献を主体的に探究する」ことを目的としている。この目標を実現するため、地域課題を「学びのフィールド」と捉え、多様な人々との共創を軸とした二つの取組を始動した。</p> <p>1.共創ウェルビーイング部の立ち上げ(令和5年4月) 生徒が学校の外に出て地域社会と能動的に関わり、ゆるやかなコミュニティ形成を実践することを目指し、令和5年4月に立ち上げた。この活動は、生徒が企画・運営の主体となり、多世代・多様な人々との対話やイベントを通じて「まちのウェルビーイング」について考え、実現に向けた具体的なアクションを起こすものである。生徒は学校という枠を超えたコミュニティでの役割や社会への貢献のあり方を体験的に探究する機会を得ている。</p> <p>2.地域文化の再構築と環境保全の融合(令和6年5月) さらに、地域の歴史的・文化的課題と現代的な社会課題を掛け合わせた新たな探究活動として、令和6年5月から「紙漉き文化再生プロジェクト」を始動した。かつて地域で盛んであった手漉き和紙文化の衰退という課題を「環境保全」という視点から捉え直し、地域に存在する資源(産業廃棄物など)を活用して和紙の再生活動に取り組んでいる。このプロジェクトは、地域文化の継承と環境意識の向上という二つの視点から、持続可能な地域社会のあり方を商業高校生の視点で再構築することを目指すものである。</p> <p>これら二つの取組は、生徒が地域社会の「担い手」として課題発見・解決に主体的に関わることで、社会人・職業人として求められる資質・能力の育成を強力に推進している。取組を通じて連携を深めた企業関係者や有識者といった「つながった人たちが学校の教育活動に参画し、新たな好循環を生み出している。彼らは全校的な対話ワークショップ「ことのはプロジェクト」に参加するだけでなく、日常的な探究活動の壁打ち相手となることで、生徒の学びとキャリア形成を多方面から支援している。</p>
<p>活動の内容</p>	<p>協力性についての具体的な取組、工夫している点など</p> <p>共創ウェルビーイング部は、キャリア教育の重要性を訴える教育関係者と地域活性化を期待する地域側との対話から始まった。生徒がヒアリングの中心となり、「生徒の成長」と「地域貢献」という共通理念を確立した。この理念に基づき、2年半で20以上のイベント実践を重ねた。解体前の呉服店でのウォールアート、こども店長による「だがしのくに」運営など、生徒が企画・運営し、地域が場所や知恵を提供する協働を実践した。生徒は教科書外の「生きた知識」や人とのつながりを実感し、地元愛を深めた。活動を通して学校と地域は強固な信頼関係を構築している。教育的配慮とリソース提供という役割分担が明確になり、自由で創造的な活動を可能にした。生徒が「地域に必要とされている」という実感が活動のモチベーションとなり、持続的な地域貢献へとつながっている。</p> <p>一方、「紙漉き文化再生プロジェクト」のキャリア教育としての意義は、教育関係者と地域・産業界が単なる協力に留まらず、理念を深く共有するプロセスそのものにある。生徒は企業を訪問し、廃棄物活用の可能性や環境への取組を直接ヒアリングした。生徒の柔軟な発想と企業の環境意識が出会い、焼酎の副産物を和紙に漉き込むという、地域課題をビジネスとして解決する共通価値観が生まれた。地元焼酎酒蔵との連携で誕生した「都城リジェネ和紙」の焼酎ラベルは、地域資源活用と環境配慮の共通理念の象徴となった。この商品は令和7年12月にリリースされ、日本航空の機内販売で取り扱われる予定である。対話と実践を通じ、教育側の「生徒の成長」と産業界の「持続可能な社会」という理念が深く共鳴し合っている。</p>
<p>活動の内容</p>	<p>継続性についての具体的な取組、工夫している点など</p> <p>【共創ウェルビーイング部】 「ウォールアート」や「だがしのくに」などのイベントを通じ、企画・実行の「型」を確立した。これにより、新たな生徒でも過去のノウハウを活かして活動できるうえ、例えば「だがしのくに」は地域の子どもの楽しみなイベントとして継続的に定着している。継続性の象徴が、都城市地域プロジェクトマネージャー、都城高専と協働して改修し、令和7年7月にオープンしたコミュニティ施設「のくにラボ」である。ここは単なる活動拠点ではなく、生徒と地域住民が日常的に交流する「リビングラボ」として機能し、活動を持続させる強力なエンジンとなっている。また、イベント実施だけでなく地域住民との対話の機会も定期的に設け、信頼関係を深化させている。生徒が抱く「地域に必要とされている」という強い実感が活動への高いモチベーションを維持し、長期的なプロジェクト運営を可能にしている。</p> <p>【紙漉き文化再生プロジェクト】 和紙の原料である楮の栽培だけに頼らず、使用済み和紙の再利用という画期的なアイデアで原料を確保する仕組みを構築した。これにより、技術習熟度に左右されず誰もが参加可能となり、生徒の活動意欲を維持する大きな要因となった。また、「都城リジェネ和紙」という独自のブランドを立ち上げ、単なる学習活動を超え、社会に価値を提供する活動へと昇華させた。「リジェネラティブ(再生する)」のコンセプトを体現する和紙の循環モデルは、生徒が卒業しても理念と技術が継承される強固な基盤である。さらに、行政、企業、市民を巻き込んだ広範なネットワークを構築し、学校単独の活動から地域全体で支え育てる「エコシステム」へと成長した。卒業生が後輩を指導したり、地域がアイデアを提供したりと、人と人とのつながりを基盤に活動が続いていく仕組みを自然に形成し、世代を超えて受け継がれる地域の新たな財産となりつつある。</p>

活動の内容	実践性についての具体的な取組、工夫している点など
	<p>【共創ウェルビーイング部】 生徒が地域課題を発見し、多様な人々と協働して解決策を企画・実行するプロセスを重視している。解体前の呉服店でのウォールアートや、子どもが駄菓子屋を運営する「だがしのくに」など、20以上のイベントを実践し、地域住民のニーズと学校のキャリア教育目標を両立させてきた。特に、コミュニティ施設「のくにラボ」の設計・施工に主体的に関わったことは、自らのアイデアを形にする貴重な経験となった。ここは多世代が集う「リビングラボ」として機能し、生徒は施設運営を通じて地域に必要とされる役割を担い、持続的に社会と関わる経験を積んでいる。このような実践を通して、生徒は活動が地域に与える影響を肌で感じ、社会とのつながりを実感している。将来のキャリアを具体的に描き、地域社会に貢献する意欲を高める、極めて効果的なキャリア教育となっている。</p> <p>【紙漉き文化再生プロジェクト】 商業高校の教育ニーズである探究的な学びの深化と、地域側のニーズである伝統文化の再生と地域資源の有効活用を融合させた。原料の栽培から商品開発、販売までの一連のビジネスプロセスを生徒自身が担うため、生きた知識と経験が得られる。和紙の強度研究や焼酎の絞りかすの配合調整といった試行錯誤は、科学的思考と問題解決能力を養う。また、焼酎ラベル制作は簿記やマーケティングの知識を実社会で活用する実践的な教材となっている。特に、焼酎の絞りかすやコーヒー殻をアップサイクルする取組は、失われた伝統に環境問題への貢献という現代的価値を付加している。地元産業と印刷会社が連携したこのモデルは、地域全体で課題に取り組む模範となる。今後、焼酎ラベルが日本航空の機内販売で取り扱われることは、地域資源の価値を全国に発信し、地域活性化に大きく貢献している。</p>
	発展性についての具体的な取組、工夫している点など
	<p>【共創ウェルビーイング部】 生徒がSNSや地域イベントを通じて活動内容を積極的に外部発信し、認知度と信頼性を高め、新たな協力者を獲得している。地域PM、都城高専と協働で開設したコミュニティ施設「のくにラボ」は、単なる活動拠点にとどまらず、多世代交流のハブとなる「リビングラボ」として機能し、活動の恒常的な発展を象徴している。この事例は地域連携のモデルケースとして、こども家庭庁や他地域、海外からも注目を集めており、視察が増加している。これまでに培ったノウハウを他団体に共有することで、活動の波及効果を広げている。施設を拠点とした日常的な交流と外部への積極的な情報発信により、宮崎県内から全国的なネットワークへと発展していく可能性を秘めている。</p> <p>【紙漉き文化再生プロジェクト】 「都城リジェネ和紙」の「再生」コンセプトは、環境意識の高い企業や消費者の共感を強く引きつけ、プロジェクトの発展を加速させている。柳田酒造合名会社とのコラボレーションでは、地域資源と技術を融合させた焼酎ラベルのストーリー性が評価され、日本航空の機内販売という全国規模の販路を獲得した。この事実は、生徒の活動が単なる学習の域を超え、本格的なビジネスパートナーシップへと発展したことを証明している。また、「和紙あかRE(り)ナイト」「都城リジェネ和紙が紡ぐ七夕の願い」などのイベントを通じ、和紙文化を地域住民の「共通の文化」として定着させている。これらの取組は、生徒にモノづくりを通じて社会課題を解決する「コトづくり」を体験させ、自らが社会に貢献できる自信と実感を与えている。このキャリア形成における大きな原動力により、プロジェクトは理念に共感した多様な人々との連携を広げている。</p>
その他	
<p>【共創ウェルビーイング部】 この取組の大きな特徴は、地域協働に加え、多角的な外部有識者との積極的な連携である。NTT株式会社上席特別研究員、金沢工業大学准教授、宮崎大学教授や特別講師などの専門家との交流は、生徒に新たな視点と知見をもたらし、将来のキャリアを社会全体を俯瞰して考える機会を提供している。また、活動の成果だけでなく、生徒の内面的な成長を可視化することに注力している。</p> <p>【紙漉き文化再生プロジェクト】 焼酎の絞りかすやコーヒー殻のアップサイクルは、生徒の環境に対する倫理観と社会課題解決への意識を大きく高めている。</p> <p>【全校的なキャリア形成を支える重層的な連携体制】 上記二つのプロジェクトが全校的な成果を生んでいる背景には、全校的なキャリア形成支援の仕組みが存在する。一つは、連携企業や有識者が全校生徒と対話する未来志向カフェ「ことのはプロジェクト」を隔年で実施していることである。この取組は、企業とのフリートークやワークショップを通じて次年度の新たなプロジェクトや探究テーマが生まれる起点となっている。また、異なる専門性を持つ社会人との直接対話は、生徒が「働くこと」を具体的にイメージするための重要な機会となり、進路の判断材料となっている。さらに、「ことのはプロジェクト」以外にも、連携企業の社員や外部有識者に日常的な探究活動の対話相手や特別講話を依頼する機会を数多く設けている。この重層的な連携体制により、特定の活動に参加していない生徒も含め、全校生徒が地域社会や産業界の最前線に触れることができている。</p>	

学校現場の評価・感想・コメントなど

【共創ウェルビーイング部】

本プロジェクトは、多様な学びの機会を提供している。特に、生徒が自ら地域課題を見つけ、多世代と協働して解決策を創り出すプロセスは、教科横断的な思考力やコミュニケーション能力を育む上で非常に効果的である。多くの生徒が活動を通じて「自分たちの力で地域を変えられる」という達成感を味わい、自己肯定感を高めている。これは学校教育の大きな成果である。また、この取組は単なるボランティア活動ではなく、生徒が将来のキャリアを具体的に考える上で貴重な機会となっている。地域住民や外部の専門家との対話を通じて、生徒は様々な職業や生き方に触れることができ、自分の興味や適性を再認識するきっかけを得ている。さらに、自分たちが企画したイベントが成功する喜びや、課題に直面した際の葛藤は、将来社会に出て直面するであろう状況を疑似体験する場となっている。これは、生徒が主体的にキャリアを形成していく力を養う上で不可欠な要素である。これまでの地域連携は特定のイベントへの参加など単発的なものが中心であった。しかし、本プロジェクトは地域住民や都城高専といった外部機関と長期的な信頼関係を築き、持続可能な協働のモデルを構築した。生徒が主体となり、地域に根差した課題解決に取り組むことで、学校と地域を往還できる仕組みを築いていることを実感している。

【紙漉き文化再生プロジェクト】

本プロジェクトは、都城商業高等学校のキャリア教育における中核的活動として、教職員の間で高く評価されている。特に、生徒の「主体性」と「当事者意識」の劇的な向上は最も喜ばしい成果である。当初は教員の指導のもとで始まった活動であったが、今では生徒が自ら課題を見つけ、解決策を考案し、積極的に行動するようになった。例えば、楮の栽培や和紙の乾燥方法において、生徒が自ら実験を行い、試行錯誤を繰り返す姿は、まさに探究学習の理想形である。また、柳田酒造との協働で焼酎の副産物を活用した焼酎ラベルを制作する過程は、商業高校で学ぶ簿記やマーケティングといった知識を実社会でどう活かすかを示す生きた教材となっている。さらに、企業や地域の方々との連携を通じて、生徒が社会の一員としての責任感や使命感を持ち始めたことも、教育者として大きな喜びである。このプロジェクトに参加した生徒の姿は他の生徒にも良い刺激を与え、校内全体に活気が生まれている。このプロジェクトを通じて育まれた生徒の創造性やコミュニケーション能力、そして地域への深い愛着は、彼らが卒業後、地域社会の担い手として活躍するための強力な武器となるであろう。

関係諸機関からの評価・感想・コメントなど

【共創ウェルビーイング部】

この取組は、都城市が目指す「若者定住」や「地域活性化」の鍵となるものである。高校生がこれほどまでに主体的に地域課題に向き合い、具体的な解決策を実行していることに感銘を受けている。特に、都城高専と連携して旧薬局を「のくにラボ」として再生させたことは、行政だけでは成し得ない素晴らしい成果であり、今後の地域づくりのモデルケースとして注目している。本所としても、生徒の活動を継続的に支援し、地域全体で若者を育む土壌をさらに強化していきたいと考えている。（行政）

最初は「高校生がどこまでできるのだろうか」と半信半疑であったが、生徒の真剣な眼差しと柔軟な発想力に驚かされた。彼らは私たちの意見を丁寧に聞き、それを形にする力を持っている。「だが生徒の」やeスポーツ大会は、子どもの笑顔を増やし、地域に活気を取り戻してくれた。生徒との交流を通じて、私たち大人も新しい視点を得ることができ、彼らが地域にとってかけがえのない存在であることを実感している。今後も、生徒にとっての「居場所」として、公民館を積極的に活用してほしい。（公民館関係者）

【紙漉き文化再生プロジェクト】

都城の失われた文化を高校生が主体となって再生させていることに大変感銘を受けている。特に、地域のお祭りのポスターを漉き返したり、柳田酒造と協働したりと、地域資源を有効活用し新しい価値を生み出す「都城リジェネ和紙」のコンセプトは、都城市が目指す持続可能なまちづくりの理念と完全に一致している。若者の視点と情熱が地域を活性化させる好事例であり、今後も全力で支援していきたいと考えている。（行政）

和紙の生産過程に焼酎の副産物という社会課題を解決する視点が加わっている点が素晴らしい。このプロジェクトは、次世代を担う若者が自らの手で社会課題を解決しようと行動していることを示しており、私たち大人にとっても大きな希望である。柳田酒造の焼酎瓶ラベルに手漉き和紙が採用されたことは、このプロジェクトの持つ価値が広く認められた証拠であると感じている。（地域住民）柳田酒造や地元デザイナー、印刷会社との連携は、高校生プロジェクトの域を超えた本格的なビジネスパートナーシップであると感じている。特に、商品の副産物を活用するというアイデアは当社のサステナビリティ目標と合致している。生徒のプロフェッショナルな対応と斬新な発想力には目を見張るものがある。今後も共に新しい価値を創造できることを楽しみにしている。（産業界）

活動の今後の展望

【共創ウェルビーイング部】

都城高専との協働で開設したコミュニティ施設「のくにラボ」の機能をさらに強化し、地域社会における「リビングラボ」としての役割を確立したい。多様な世代が集まるこの場所を、生徒が新たな地域課題を発見し、解決策を実験的に試す場として活用する。また、これまでのNTT株式会社上席特別研究員、金沢工業大学准教授、宮崎大学教授、特別講師といった外部有識者との連携をさらに拡大し、より多くの専門家や企業を取組に巻き込んでいきたい。具体的には、他の地域や学校との協働プロジェクトを立ち上げ、これまで培ってきたノウハウや事例を共有することで、地域連携のモデルを全国に広げる。さらに、生徒が自律的にプロジェクトを運営していく力を育むため、リーダーシップ育成やチームビルディングに特化したプログラムを導入する。また、個々の興味関心に応じたテーマ別グループを立ち上げ、より専門的で深い学びを追求できる環境を整えたい。生徒自身がプロジェクトの方向性を決定する権限を拡大することで、活動へのオーナーシップとモチベーションを一層高める。これらの取組を通じて、生徒自身が主体となって創り上げていく生きたコミュニティへと進化させていきたい。

【紙漉き文化再生プロジェクト】

本プロジェクトは、これまでの確かな成果と強固なネットワークを基盤とし、さらなる飛躍を目指す。今後の展望は「都城リジェネ和紙」を単なる製品ブランドにとどめず、「持続可能な社会を創造するための理念」として社会に深く浸透させることにある。原料調達については、プロジェクトの安定性を高めるため、強固な資源循環モデルを確立する。これは地域ポスターの再利用モデルを広域的なリソース循環へと発展させるものであり、外部環境に左右されない極めて強靱な持続可能な原料調達システムの実現を目指す。教育的な展開として、文化の継承と生徒のキャリア意識醸成を柱とする取組を強化する。具体的には、富山県で和紙文化を継承する川原隆邦氏との連携を計画している。この協働は、生徒に伝統技術の精髓と革新性を直接体感させる貴重な機会となる。さらに、スターバックスコーヒーイオンモール都城駅前店との手漉き和紙ワークショップを継続的に展開し、文化交流のプラットフォームを拡大する。この企業連携モデルは、地域社会の枠を超えた広範な層との接点を生み出し、「都城リジェネ和紙」の理念と持続可能性へのメッセージを効果的に発信する。これにより、伝統文化の現代的な価値を訴求し、教育活動の持続的な推進力を確保する。上記二つの取組で確立した仕組み、ノウハウ、そして人的ネットワークは、学校全体へのキャリア教育の深化という形で引き続き還元していきたい。二つの取組が持つ外部との持続的な連携モデル（リビングラボ、リジェネ和紙のエコシステム）は、本校のキャリア教育全体を支える「エコシステム」となる。プロジェクトで培われたノウハウは、他の部活動や学校行事にも展開・応用させ、学校全体が地域社会と連携しながら、生徒の自律的な学びを育む環境を確立したい。学校全体の教育力の向上と地域社会への貢献を両立させる教育体制を実践したい。

活動の様子



生徒が地域との共創により完成させたコミュニティ施設「のくにラボ」。オープン当日のイベントを終え、達成感に満ちた生徒の集合写真。衰退した商店街の一角に、まちの回遊を促す「リビングラボ」として誕生したこの空間は、世代を超えた交流を生み出すプロジェクトの象徴となっている。



宮崎県立都城商業高等学校「紙漉き文化再生プロジェクト」コアメンバーの生徒たち。手にしているのは、自分たちが漉いた「都城リジェネ和紙」。